

「イエスが分からない」

ヨハネの福音書 20 : 14

April.17.2022

ヨハネの福音書 20 : 14 (パワポ)

Preface

主イエス様が、死よりよみがえられました。
最後の敵である死を滅ぼすために、眠った者の初穂として復活されました。

イエス・キリストこそ見えない神のかたちであられ、万物をお造りになり続け
治めておられる神でありながらも十字架に架かれ、その血によって平和をも
たらし、天にあるもの地にあるもの万物すべてを和解させるために復活されま
した。

そして、愛をお示しになりました。

主イエス様の十字架上の死が私の罪の贖いのためであり、その復活を信じる
者は、創造主なる神を認めないという根本的な罪のみならず、ありとあらゆる罪
が赦され、永遠のいのちが与えられ、主イエス様と同じように栄えあるものとし
てよみがえらせ、まことの神とともに神の子として、キリストとともに共同相
続人として永遠に神の国で生きる祝福に与ります。

確かに、主イエス様は復活なさいました。

ですが、今読みましたヨハネの福音書に登場してくる「彼女」と称されている
女性マグダラのマリアは、自分のすぐ後ろに立っておられる死よりよみがえら
れたイエス様を肉眼で見ても、その方がイエス様であることが分かりませんで
した。

彼女の持っている先入観がそうさせたのでしよう。

死者が復活するはずなんかない、鞭打たれ、茨の冠をかぶり、血みどろでお亡
くなりになった主イエス様がこんなにも聖く美しく平安なお姿であるはずがな
い、確かにイエス様は十字架で惨たらしく言葉にならない程の悲劇の死を遂げ、
終わったという先入観が、肉眼でイエス様を見ても、その方がイエス様である
ということを分からなくしてしまいました。

先入観が、事実をねじ曲げるのです。

ある意味、これが小さなからし種ほどの信仰さえも持つことの出来ない私たち
の限界、姿なのかもしれません。

だからと言ってこのマグダラのマリアが、主イエス様に対する信仰がなかつ

たわけではありません。

弟子たちがユダヤ人からの迫害を恐れて逃げ隠れしている最中にも、勇敢にイエス様のご遺体が収められているという墓に誰よりも早く向かいました。

長い間苦しめられていた七つの悪霊をイエス様に追い出して頂いたという彼女の体験は、彼女の人生を根底から変えただけでなく、決して忘れることの出来ない恵みとなり祝福となって、イエス様に真つすぐに従う者となりました。

ところがそんな彼女でも、復活したイエス様にすがり付くことが出来るほど直ぐ近くで、いの一番にお会いしたにもかかわらず、イエス様のことが分かりませんでした。

なぜならば、先ほども言いましたように、復活されたイエス・キリストという祝福は、見るも無残な十字架の死を遂げたイエス様の苦しみからは到底想像できないものであったからです。

「そんなことはあり得ない」という先入観が、実際に肉眼で見て、目から入ってくる確かな情報さえも歪曲させました。

Part One

6年前、土浦めぐみ教会の青年主事を辞するまでの私は、主イエス様の復活についてメッセージするイースター礼拝の説教に対して苦手意識を持っていました。

もちろん、イエス様の復活を信じていないということではありません。当然のようにイエス様の復活を信じ、信じられていました。

それなのに、苦手意識がありました。

と言いますのも、主イエス様が復活されたことを信じてもらえるように論理立てて、証拠を示して、何とかイエス様の復活が真実であることを証明して、説得して、納得していただき、信じて頂かなければならないという思いに支配されていただけでなく、死者の復活なんていう変なことを信じている変な人だと思われたくないというプレッシャーのような、恩知らずな背信者のような気持ちも相まって、変な苦手意識がありました。

それまで、「死んだ人が生き返ったという普通に聞いたら、『そんな馬鹿な話があるか!』と思われるような事を何とかして事実なんだということを知っていただくこと」こそが、イースター礼拝に相応しいメッセージだと思っていました。

つまり、「説得」し、「納得」してもらわなければ、イースターのメッセージにはならないと変に思い込んでいました。

ところがその後、聖書の御言葉と取っ組み合いをしながら、幾度となく失敗したと思うような出来事に溢れた日々の歩みを祈りつつ送らせていただく中で、「ああ、イエス・キリストが復活されたことを僕が証明することなんか出来ない

し、する必要もない。ただ、復活の事実を宣言、話せばいいだけだ」ということに気付かされるんです。

昔、ロシアのサンクトペテルブルグにある物凄い立派な美術館で、信憑性に関してはよく分かりませんが、十字架で死なれたイエス様を覆ったという血の付いた布切れを見たことがあります。

実のところ、聖書のどこを読んでも、ビデオの録画やテープの録音などの資料とか、何か物的証拠のようなものを提示しながら、イエス様の復活の事実を説明したためしがないということに、ある時気付きました。

むしろ、物的証拠よりも、人的証拠をもってイエス・キリストのよみがえりを説明しているということに悟らされたんです。

即ち、キリストの復活を信じている私という人、私たち一人一人をもって、神様はキリストの復活の証拠としているということに気付かされました。

廃れ、朽ち、古びていく物的証拠ではなく、永遠に新しいキリストの霊によって新しく生まれた者たちを生まれさせ続けることによって、神様は、イエス・キリストの復活を今の今まで証明し続けて来られたということに気付いてしまいました。

誰が何と言おうと、全世界でキリスト者が2000年間ずっと生まれ続け、どんな迫害や無理解や妨害があろうとも、キリスト者の群れでありキリストのからだである教会は、2000年間生まれ続けてきたという事実を否定することは出来ません。

生まれ続けてきたクリスチャンたちという人的証拠こそ、何にも勝る物的証拠であることに気付かされました。

それからはもう、イエス・キリストの復活を、「あーだこうだ」とこねくり回しながら説明するのではなく、ただ事実として、事実を普通に話そうと思えるようになりました。

イエス様も、十字架に架かれる前のゲッセマネでの血の汗を滴らせながらの祈りの中で、「彼らが一つとなって愛の内に生き、キリストと一つとなってともに生きることをもって、世が、イエスがキリストであることを知るようになります」と祈りましたが、そのイエス様の祈りのようにキリスト者として愛の内に普通に生きようと努め、キリストの復活について普通に事実として話せばいいだけだと思えるようになりました。

空が空で、鳥が鳥で、海が海で、魚が魚であるという事実を話すように、キリストはキリストで、復活は復活であると話せばいいだけだと思えるようになりました。

分かる人には分かるように、分かる時には分かるように神様がしてくださることを信じ、期待し、願って、話し祈ればいだけだと思えるようになりました。

私の妻とよく小競り合いになるのが、私がどんなに事実を事実として説明しても、中々そのまま受け止めてもらえないことで腹が立つことがあるのですが、いつそれが妻に事実として受け止めてもらえるかと言いますと、本とか雑誌とかテレビで私以外の第三者が私が言っていることと同じことを言っているのを発見すると、その時初めて、「ああ、この人が言っていることは本当だったんだ」と分かってもらえます。

ちょっと例えがどうかとは思いますが、神様が分からせてくださることも、これにちょっと似ているかもしれません。

Part Two

マグダラのマリアも、肉眼で見ても見えなかったイエス様が、時に適った主からの働きかけによって、復活したイエス様が見えるようになります。

ヨハネの福音書 20 : 15 - 16 (パワポ)

イエス様を見て墓守だと思っていたマリアが、イエス様に「マリア」と自分の名前を呼ばれた時に、ハッとしてイエス様がイエス様だと分かりました。

不思議ですね。

イエス様に名前を呼ばれると、イエス様がイエス様だと分かってしまうんです。

人は、名前を呼ばれると、「ああ、この人は私のことを知っていてくれる」と、その間柄に関係性を見出して、名前を呼んでくれた人の存在を無きものには出来なくなります。

先週の水曜日、このマリアとイエス様の会話を仕事部屋で一人で読んでいて、大泣きしました。

私自身もイエス様に、「(韓国語で) プンファヤ」と呼ばれて、復活したイエス様に出会い、「ああ、イエス様は僕のことを知っておられるんだ」ということを初めて知り、今も変わらずイエス様のことをイエス様だと分かることがどんなに幸いな事か、イエス様のことがイエス様だと分かることが何とうれしいことか、感謝なことか、生きる力で、生きる理由で、知恵で、知識で、根拠で、すべてであり、宝であると思えることが、心が震えるほどに喜びました。

「これ以上の証拠がどこにあるだろうか！ イエス様が私のうちに生きていてくださり、喜びの涙を、今リアルに現実に流させてくださる以上の確かな証拠

がどこにあるだろうか！」と、その時また、事新しく実感いたしました。

Part Three

神が神であられ、イエスがイエスであられ、イエス・キリストこそがすべての理由であることを、神様から名前を呼ばれながら気付かされた人たちが聖書の中にはたくさん登場してきます。

信仰の父と言われるアブラハムには、「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの報いは非常に大きい」と呼んでくださり、

年老いて自信を無くしていたモーセには、燃え尽きない芝の中から「モーセ、モーセ」と呼びかけ、右往左往している少年サムエルにも「サムエル、サムエル」と名指しで呼び、

また大きな人生のスランプに陥り抑うつ状態にあったエリヤには「エリヤよ、ここで何をしているのか」と優しく語り掛け、悲しみの預言者と言われたエレミヤには「エレミヤよ、あなたは何を見ているのか」と諭し、

信仰を生き抜いたダニエルには「ダニエルよ、行け」とさらに促しました。

新約聖書に入りますと、人の姿をとり来られた神のかたちであられるイエス様が、12弟子のリーダーペテロに「バルヨナ・シモン、あなたは幸いです」と宣言し、また「ヨハネの子シモン、あなたは私を愛していますか」と問うたこともありました。

過分に徴収していた税金で富を築いた取税人ザアカイには「ザアカイ、今日わたしはあなたのところに泊まることになっているから、その木から急いで下りてきなさい」とサプライズの言葉をかけ、

死んでからすでに4日経って墓に入れられていたラザロには、「ラザロよ、出てきなさい」と大声で叫ばれ、

そしてついには、クリスチャンたちを片っ端から取っ捕まえて処刑しようと熱心に働いていたパウロにまで「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と、大きな光とともにパウロに語り掛けなさいました。

自分の名前を呼ばれたすべての人たちは、「ああ、神様は、イエス様は私のことを知っておられるんだ」と、それまで気付かなかった神との関係性に気付かされ、イエス・キリストの存在が分かるようになっていきました。

そして、これら名前で呼びかけられたすべての人々は、神が神であられ、イエスがイエスであられ、主イエス様こそ万物の理由であり、宝であり、初めであり終わりであられ、死よりよみがえったキリスト救い主であることを本心から知るようになるんです。

ペテロが、ペンテコステの時聖霊に満たされて話した、「この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです」という言葉が本当だということを知らされてしまうんです。

また、ただ知り悟っただけではありません。
事実が事実だと分かったのですから、あとすることはただ一つです。
その事実を人にただ話すだけ、ただ伝えるだけです。

Part Four

「そんなはずが！」という先入観のために、肉眼で確かにイエス様を見てもイエス様だと認識できなかったマグダラのマリアも、イエス様が死よりよみがえったイエス様だと分かると、直ちに、その事実を伝えに行きました。

ヨハネの福音書 20 : 17 - 18 (パワポ)

イエス・キリストのよみがえりの事実を知ったならば、あとは伝えるだけです。逆にこんなすごいことを知ってしまったんですから、伝えずにはいられませんが。

イエス様も、「行って伝えなさい」と仰いました。

ただ単に伝えれば、あとはイエス様が、ご自分の時に、ご自分の方法で、ご自分の御旨に従って、伝えられたその人の名前を呼びながら、「キリストは今も生きておられる」という事実を事実として覚えることが出来るようにしてください。

使徒の働き 2 章で聖霊に満たされたペテロが、「このイエスを、神はよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です」と、迫害を恐れて隠れていた姿からは想像できないほどに、声を張り上げて人々に語り掛けますが、

「イエス・キリストが復活されたことの証拠は、この私自身です。私自身がイエス様のよみがえりの証拠です。なんたって、死より生き返り父なる神の右に上げられた主イエスを、正気で信じられちゃってるんですから。しかも、めちゃめちゃうれしいし、心が躍るほどに喜べるんです。そんな私という存在こそが、キリストが復活されたことの証人です」と、事実を話しているだけですから怖気づくこともなく、ただ事実を事実として、美味しいものを美味しいと、楽しいものを楽しいと言うように話しました。

そして、その楽しそうに、嬉しそうに、美味しそうに話すキリストの復活の証人ペテロの言葉を聞いて、3000人というものすごい人々がイエス様を信じたい、信じられると告白していきました。

これまた不思議なことです。

イエス・キリストの復活の証拠は、私たち自身です。
私たち一人一人が、主イエス様の復活の証人です。
使徒の働きのパテロの言葉を見てみたいと思います。

使徒の働き 2 : 3 2 (パウロ)

使徒の働き 3 : 1 4 - 1 5 (パウロ)

使徒の働き 4 : 1 2 - 1 4 (パウロ)

無学で普通の人であったペテロもヨハネも、事実を事実だと語るだけですから、誰からも強いられることもなく自然と大胆に話すことが出来ました。イエス様の復活を事実だと知ったから、ただ事実として話すだけです。

Part Five

私たちが主イエスの復活の証人だということを話しますと、ひとつ思い出されることがあります。

私たち家族がアメリカにいる時、宣教師の方々を招いて美味しい食事と素敵な講義とプレゼントを下さる韓国系の教会がありまして、私たち家族は日本の宣教師として招かれその教会に行ったことがありました。

で、その教会の主任牧師の方は、私が 20 年前韓国の神学校に行っていた時、キリスト教書籍の中でベストセラーになった「さつまいも伝道王」という本をお書きになった方だったんですが、

私が韓国で伝道師として働いていた教会でもお招きして、特別講義を伺ったことがあったので、その牧師先生とは初見ではありませんでした。

で、この先生の経歴がとても興味深いんですが、海軍士官学校を卒業したにも関わらず、機械工学を学ぶために大学院の修士課程に進んで、エンジニアとして働いている時にクリスチャンになるんです。

で、その後本のタイトルにもなった「さつまいも伝道」とご自分で命名した方法でイエス様のことを伝え始めて、韓国のキリスト教界でもものすごい有名になって色々な教会で証しされたり、「さつまいも伝道学校」というプログラムを作って講義をなさったりしていたのですが、結局献身へと導かれて、アメリカの神学校で修士課程、博士課程を終えて牧師となり、現在はカリフォルニアで牧会をしている方なんです。

で、この方が提唱する「さつまいも伝道」というのは、さつまいもを蒸かす時に、いもが柔らかくなったかどうかを確認するために箸を刺して確認しますが、私たちクリスチャンは、みんなこの箸を持って行って、その箸をいもに刺した時スッと入ることを期待して刺すように伝えるだけでいいと言うんです。

で、何が私たちのいもを刺すための箸になるかと言いますと、クリスチャンとしてただ単純に、素直に普通に口にする言葉が、箸になると仰るんです。

「私ね、実はクリスチャンなんです。毎週日曜日教会に行っているんです。でね、私クリスチャンやっていて、ほんとついに幸せなんです」という言葉と表情

が、箸になるって言うんです。

蒸かす前のいもは固くて、箸を刺そうとしたところで、とてもとても入る物ではないですが、蒸かしているうちに刺した箸がスッと入る時があるように、私たち誰もが、人生の中で色々な事に直面して、経験して、苦勞していもが蒸かされていくように心が魂が蒸かされていくような状態になって、またどこかで聞いたことのあるイエス・キリストという名前や聖書やキリスト教のこと、さらには、その人がそれまでの人生の中で出会ったことのあるクリスチャンの姿とか言葉とかが相まって、その方自信が蒸かされて、スッと箸が入る時があると言うんです。

キリストの証人として生きるとか、イエス様のことを伝えるとか、伝道とかと言いますと、なんかこう身構えてしまいましたが、イエス様のことを伝えるっていうのは、とても単純で、簡単で、リラックスして出来るものだと仰るんです。

「私ね、クリスチャンなんです。でね、クリスチャンとして生きていて、ほんとうに幸せなんです！」 これだけで良いって言うんです。

これをクリスチャンみんなが言い続ければ、私たち人間皆神様に造られた存在なので、いつか誰かの箸が、その言葉がスッと入っていく時があると言うんです。

さらには、ちょっと冗談めかして、「固いいもも、何度も箸を刺しているうちに穴だらけになって、誰かの箸がいつかは刺さるようになりますから」と、いたずらっぽい表情を浮かべながらおっしゃるんです。

もちろん最終的には神様の御業ですが、私たちの存在そのものが、私たちの普通に話すその言葉が、イエス・キリストがよみがえり、今も生きておられるという証拠、証人になるんです。

証人ならば、話すだけです。 伝えるだけです。

難しいことを伝えるのではありません。

「私ね、クリスチャンなんです。でね、クリスチャンでね、本当に幸せなんです。」 これだけでいいんです。

Part Six

イエス・キリストが生きておられることの証拠は、今ここにいる私たち一人一人の存在です。

私たち一人一人の事実を事実だと普通に話す、事実を事実だと普通に伝えるその言葉が証拠となり、証人となります。

ただここで問題になるのは、それは分かっているけれども、分かっているつもりだけれども、復活したイエス様が見えなくなってしまうことがあるということ

と、そういうことを私たちも経験します。

マグダラのマリアが経験したようなことを経験します。

「もうダメだ!」、「とてもじゃないけど受け止めきれない!」、「何なんだこの痛みは!」、「なんでこんな悲惨なことが起こるんだ!」、「何でこんなことを経験しなければならないんだ」、「かすかな光さえも見えない」、「もう何もかも終わった」というような理解しにくい、到底分からないようなところに置かれることがあります。

しかし、一度でもイエス様が出会ってくださったことがある人ならば、イエス様に出会いたいと思っている人ならば、その中にイエス様を見出すことが出来るように導かれていきます。

「マリア」と名前を呼び、そこにイエス様が、栄光のイエス様が、光り輝いておられるイエス様が、苦しみ、痛み、死から解放された希望のイエス様がともにいてくださっていることを悟る時へと導かれていきます。

マグダラのマリアが経験したことから教えられることは、どんなに悲惨なことや苦しいことや受け止めきれないことや理解しにくいことであっても、そこに復活のイエス様のような希望があるという事実が見えていないというだけで、実はそこに、希望と励ましと慰めと悟りがあるという事実です。

復活したイエス様は、私たちの先入観や絶望、悲しみを超えた私たちの力そのものであります。

今あるその姿かたち様相、ありさま、その事態事局からは到底見ることの出来ない祝福と益と恵みを覚えることの出来るきっかけとなり、神を愛する人たち、即ち、神のご計画にしがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることが事実であることの裏付けが、よみがえられたイエス・キリストです。

イエス・キリストのうちにある者たちは、死んでも生きるのです。

倒れても手を取って立たせてくださり、いつの間にか足とくるぶしが強くなって、躍り上がって歩き出すことが出来るようになります。

そして、その立ち上がった事実と経験をもって、また神様を褒めたたえることが出来ます。

イエス・キリストの復活、復活されたイエス・キリストは、私たちの力そのものです。

Conclusion

最後に、使徒の働き 3 章の言葉を見たいと思います。

使徒の働き 3 : 6 - 10 (パウロ)

イエス・キリストの復活の事実は、今も私たちを通して連鎖しています。
この祝福の連鎖の中に、復活の証人の連鎖の中に入れられていることを喜びたいと思います。

お祈りいたします。

祝祷：使徒の働き 2 : 32